



日本歯科大学（新潟病院
医科病院）

Vol.33
2017.5.1

アイヴィ通信

～皆様の口腔と全身の健康を目指して～

総合診療科の紹介

新潟病院総合診療科
科長

海老原 隆



新潟病院総合診療科が現在のシステムになったのは、平成13年4月からで今年で16年目になります。以前は、患者様のお口の症状に対して保存科や補綴科など専門分野別の診療科にて治療をさせていただいておりましたが、治療の進行とともにその都度診療科の移動と主治医の変更もありました。そのため現在の総合診療科は、①患者中心、②地域の要請に応える、③包括医療というプライマリ・ケアの基本理念に基づいて、患者様本位の診療をモットーに初診から治療の継続および予防までを一診療科担当医制治療に変更しました。

つまり1人の主治医が責任を持って、虫歯、歯周病、抜歯、入れ歯などの治療を最初から最後まで総合的に治療するシステムです。

高度あるいはより専門性に特化した治療が必要な場合は、特殊外来や専門医と連携を行います。総合診療科が主体となっている特殊外来には、歯科アレルギー外来、白い歯外来、スポーツ歯科外来、いき息さわやか外来、あごの関節・歯ぐき外来があります。専門医は、歯科保存治療専門医、歯周病専門医、日本歯科補綴学会専門医、日本顎関節学会専門医、日本口臭学会専門医、日本スポーツ歯科医学認定医、日本歯科審美学会認定医、日本顕微鏡歯科学会認定などを取得した医師が専門医として在籍しております。歯科用レーザーや歯科用マイクロスコープ（顕微鏡）などの最新機器を設置し、より高度で専門的な治療を行っています。

また、大学病院としての歯科医師や歯科医療関係職種の教育・養成という使命も担っており、総合診療科では臨床研修歯科医（卒後研修歯科医師）、臨床実習生（新潟生命歯学部5年生）、病院実習生（短大歯科衛生士）が臨床研修（実習）を行っています。新しい世代の発展のためにも、ご理解とご協力を頂きたい所存でございますので、お気づきの点がありましたら是非ご意見・ご助言いただけたら幸いに存じます。



医の博物館へようこそ!

●日本歯科大学新潟生命歯学部
医の博物館

佐藤 利英



◆必見の書籍



●写真1：新設展示の全景

館内は一周することでその展示品を観ることができますが、そのほぼ中央に新たな展示コーナーを開設しました。当博物館には展示品のほか未公開品も多く、まだまだ貴重な史料が多数保管されています。その中には歴史的な解剖学の洋書が多く、現在では一般的な書籍サイズのA4版ではない大きなサイズ（フォリオ版やエレファント・フォリオ版と呼ばれるサイズ）のものもあります。西洋の書物のサイズは、5世紀ごろに始まったとされる羊皮紙の材料である羊の皮の大きさで決められていました。羊一頭分の皮が全紙版で、そ

それを半分にした大きさがフォリオ（ほぼA3サイズ）、それを半分にしたものが四折版（ほぼA4サイズ）、四分の一にしたものが八折版（ほぼA5サイズ）、八分の一が十六折版（文庫版）とされています。すなわち、エレファント・フォリオ版はフォリオ版よりもさらに大きな書籍を意味しています。しかしこれらの大きな書籍は日本には元来存在せず、和書（B5版サイズ）とは全く異なります。これは紙や製版の違いによるところが大きいと思われる。館内では和書と洋書のいずれもあり、その大きさの違いが一目でわかると思います。また洋書でもポケットサイズのものもあります。

現在、新たな展示コーナーには、普通の展示ケースには入らない大きな書籍が2冊展示してあります。G.ビドローの「105図の人体解剖学」1685年版とB.S.アルビヌスの「人体筋骨構造図譜」1749年版です。これらについて紹介します。



●写真2：上段左は「ビドロー解剖アトラス」（A4版）、中央はG.ビドロー「105図の人体解剖学」、右は杉田玄白ほか訳「解体新書」（B5版）、下段はアルビヌス「人体筋骨構造図譜」

1. ビドロ「105図の人体解剖学」

Govard Bidloo(1649-1713)はオランダのライデン大学の教授で、生涯に1冊だけ解剖学書を著しましたが、それが本書「105図の人体解剖学」(ラテン語)です。タテ53.3cm×ヨコ37×厚さ6cmで重さが6.7Kgもある巨大な本です。タイトルにあるように本書には105枚の銅版画を収録しており、人体が解剖されている場面をそのままに写し取った解剖図です。また本書の図はわが国最初の西洋医学の翻訳書「解体新書」の挿絵としても使用されています。当館ではビドロの解剖図と「解体新書」の剖出図の同じ頁を並べて展示しているので、細部までの同じ描写を見比べていただければと思います。現在でも解剖図譜における人体解剖表現の頂点に位置付けられている素晴らしい解剖学書です。

2. 「アルビヌス人体筋骨構造図譜」

Bernhard Siegfried Albinus(1697-1770)もオランダのライデン大学教授です。本館でも所蔵している幾つかの著作や解剖図を編集して出版し、約20年後に出版したのが自身の「人体筋骨構造図譜」です。タテ74.5cm×ヨコ53.5cm×厚さ6.8cmで重さがなんと12.5Kgもある超巨大な本です。解剖図に直接レベル文字(各部位を示す解説文字)を付けずに、別ページに同じ図を並べて描きレベル文字を貼り解説しています。こうすることで文字に邪魔されず、細部に至るまでより精緻な解剖図を見ることができます。そしてこの本は製作するまで22年の歳月を費やしたといわれています。本書は理想の人体を追究した解剖図譜であり、銅版画による解剖図の最高傑作と目されています。

ガラス越しではありますが、その迫力には目を見張るものがあります。また銅版画であるが故の精緻な芸術性の高い解剖図の描写には驚くばかりです。ぜひ「医の博物館」でまじかで、目の当たりにしていただきたいと思います。



第5回ロビーコンサートを開催しました



平成29年1月13日(金)、当院1階ロビーにて「庄司愛さんと渋谷陽子さんによるバイオリンとチェロの二重奏コンサート」を開催しました。

雪の降りしき中、開演前から多くの皆様にお越しいただきコンサートが始まりました。「メヌエット」「アベマリア」など5曲演奏していただき、患者さんから「天井が高くヨーロッパの協会の礼拝堂にいるような気分だった。」「音の響きが良く快く心温まるコンサートだった。」と好評をいただきました。

演奏者の庄司さん渋谷さん、コンサートに足を運んでくださった皆様、どうもありがとうございました。



福祉・介護・健康フェア

●日本歯科大学新潟生命歯学部
訪問歯科口腔ケア科

吉岡 裕雄



●メインステージの様子



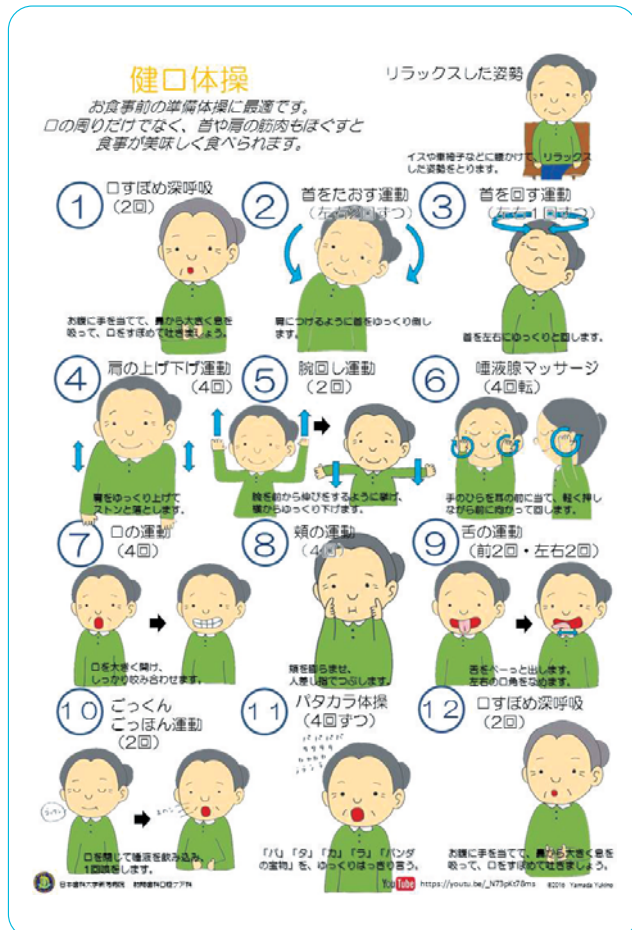
●セミナーステージの様子

2016年11月に「福祉・介護・健康フェア」が朱鷺メッセで新潟日報社と新潟社会福祉協議会が主催で開催されました。今年は長岡地域でもハイブ長岡にて同イベントが開催され、新潟会場だけで16000人を超える来場者があり、大変盛況となっております。県民の福祉や介護に関する理解と関心を高め、健康増進に寄与することを目的に毎年開催されている、福祉・介護・健康の情報を発信する総合イベントです。今年のテーマは「安心できる暮らしを提案～明日のためにできること、地域包括ケアシステム～」と題し、136の企業と団体がブースを出展し、来場者に最新情報を発信しておりました。

今年で5回目となっておりますこのイベントに、県民の健康を口から守るべく日本歯科大学新潟病院も13日(日)に朱鷺メッセ、23日(水・祝)にハイブ長岡にて、2年ぶり2回目の出展参加いたしました。会場入り口付近の目立つ場所にブースを構え、口腔ケアに関する企業と団体と共に“口腔ケア村”を作りました。口腔ケア村では口腔ケアに関するグッズや最新情報、口腔ケアと介護に関する仕組みなどを紹介す

るブースをそろえ、当院は口腔内の細菌数測定と口腔水分計を使った口腔乾燥チェックを無料で行い、口腔ケアの意義や方法などを分かりやすく解説いたしました。口腔ケア村に立ち寄った参加者からは「口腔ケアという言葉は知っていたが、ただの歯磨きだと思っていた。改めて説明を受けてとても大切だと感じた」「自分がいつもやっていた口腔ケアに間違っているところがあったので、とても勉強になった」「口腔ケアは大切だけど難しい」などの意見が聞かれました。

会場では企業展示ブースの他、2つの大ステージでステージイベント開催されていきました。観覧席300名ほどのメインステージでは杉田かおる氏や石川ひとみ氏など豪華ゲストによる講演やトークライブなどが開催されていた中、日本歯科大学からも「いつまでもおいしく楽しく食べるために歯科ができること～訪問歯科診療と食べる飲み込むリハビリ～」と題し、新潟病院



訪問歯科口腔ケア科 准教授 白野美和先生と東京にある附属病院 口腔リハビリテーション科 高橋賢晃先生のお二人による講演を企画しました。病気や障害などによって歯科医院への通院が出来なくなってしまった方は口腔内管理がいき届かず、歯磨きも不十分になることで口腔内トラブルが絶えません。介護者の口腔ケアも介護の大きな負担になっています。また、麻痺や筋力低下によって食事がうまくできなくなり低栄養になったり窒息や誤嚥性肺炎も口腔機能低下から引き起こされる要介護者の問題点として注目されております。現在、多くの歯科医院で訪問歯科診療が実施され、要介護者の口腔管理やリハビリテーションも在宅に居ながら行えるようになり、その重要性も高まっていること等が紹介されました。講演のあとには新潟を代表するフリーアナウンサー小野沢裕子氏を交えた3名で、要介護者の口腔ケアや訪問歯科診療、口腔リハビリテーションについての白熱したディスカッションが行われました。

一方、メインステージより少し小ぢんまりしたセミナーステージでは、新潟で当地アイドルRYUTistのミニライブや車いすダンス、新潟市における医療と介護の連携事業の紹介などが行われていました。我々のセミナーステージでは「食べる前のストレッチ“健口体操”」と称し、口の体操を寸劇を交え紹介しました。オーラルフレイル(口の虚弱)は身体の虚弱に深く関係していることから、口の機能を健康に保つことは身体の健康を維持する大切な要因と考えられています。“健口体操”を食事の前に行う事で、食事中のムセ予防になるほか、口腔機能の維持・増進になることが期待できます。最近、食欲がなくて元気な出ないなって方にお勧めです。日本歯科大学新潟病院のホームページ(診療科のご案内→訪問歯科口腔ケア科)でも紹介していますので、気になった方は是非チェックしてみてください。



●ブースの様子

新潟
病院

臨床研修歯科医師の



第28回 オーラル・フレイル



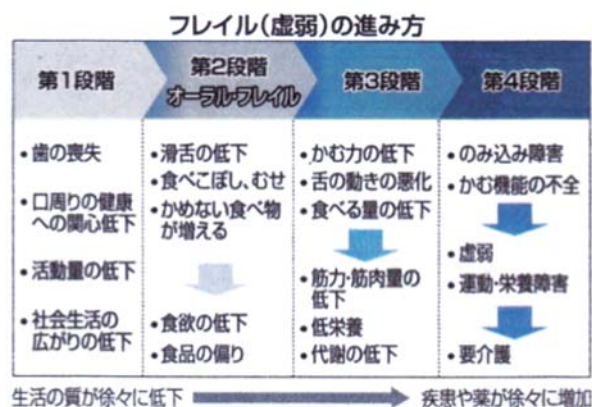
総合診療科

●佐藤 史明 ●大滝 梨菜 ●島村 直宏

皆 さん、オーラル・フレイルという言葉を知っていますか。フレイルとは虚弱という意味ですが、日常生活でのちょっとした滑舌の悪さや食べこぼし、水を飲む時にむせるといった口周りのトラブルは、高齢者の体が弱っていくサインです。こうした不調を「オーラル・フレイル」と呼んでいます。

高 齢者での口の弱りは全身の虚弱の始まりであり、運動機能低下の前段階です。兆候として「硬い物が食べにくい」「水でむせる」「口が渇く」などの症状があります。口の中の不調を放置すると「咬めない」→「軟らかい食べ物を選ぶ」→「さらに衰え、いっそう咬めない」という「食べる」機能の低下の悪循環が起き、食欲低下、栄養状態悪化につながります。

食 事の際、奥歯で咬むと筋肉は良く動き、前歯のみで咬んでも筋肉はあまり動きません。軟らかい物を食べる際は主に前歯しか使わず、奥歯で噛むための筋肉は徐々に衰えます。その結果、好き嫌いより食べやすさで食べ物を選ぶようになり、これらも咬む力の低下を示すサインになります。



簡 単に口の動きがわかる方法もあります。「パ・タ・カ」を短時間でどれだけ細かく発音できるかというもので「パ・タ・カ」は唇や舌を動かす機能を示し、「カ」は飲み込む力を示します。

口周りのちょっとしたトラブルへの対策として、まずは歯科医院を受診して、相談してみてもいいのではないでしょうか。

編集
後記

■うららかな春の日差しが心地よい季節となりました。皆様お変わりなく過ごせているでしょうか。この時期は様々な場所において新しいことが始まりだす時ですね。地域歯科医療支援室一同も新たなメンバーを迎え、今年度も地域歯科診療支援病院と地域医療の融合を目指し張り切っていこうと皆、燃えています。新年度もどうぞ宜しくお願い致します。



日本歯科大学新潟病院・医科病院

アイヴィ通信



発行日／平成29年5月1日 発行人／山口 晃 大越 章吾
〒951-8580 新潟県新潟市中央区浜浦町1-8
TEL 025-267-1500(代) FAX 025-267-1546(支援室直通)